

一人一首抄

佐 佐 木 信 綱

本日、高木、武田二博士の講演の次に間島琴山君の朗詠があります。それは、萬葉集の作者八人、萬葉風の歌八人の作であります。その十六人の作各一首は私が選びましたので、それについて一言します。

すぐれた歌人を選ぶといふことは古くからありまして、萬葉集卷十七には「山柿の歌泉」の句があり、古今集の序文には六歌仙の名があげてあります。さうして、一人の作から一首を選んだことは、藤原公任の三十六人仙、藤原定家が色紙形にかいたいはゆる小倉百人一首があります。わが国の文芸史の上には、大陸の影響を少なからずうけてゐますが、一人一首を定めて諸家の作品を集録することは、わが国で初めてなされたので、中国には無いやうであります。親しい漢文学の知人にも問ひましたが、此の方式は邦人の創意に成るものであらうとの答へでした。

さて私の選びましたのは、まづ柿本人麿の作「淡海の海夕浪千鳥汝が鳴けば心もしのに古おもほゆ」であります。人麿の作の中から一首を選ぶといふことは容易でなく「大君の遠のみかどとありがよふ」とか「ひむがしの野にかぎろひの立つ見えて」などがすぐ浮び出ますが、近江の湖畔に立つて壬申の乱を偲んだ、情景ともに備はつてゐる此の「淡海の海」の一首を選びました。湖畔懐古の作には、「近江の旧都を過ぎし時」に作つた長歌及び反歌があります。が、これは、それとは別の時の作かと考へられます。なほ第四句は、近世以来、「心もしぬに」とよまれてゐましたが、「心もしのに」とよむべきであります。

高市黒人は、よんだ歌の伝はつてゐる数が少なく、「いづくにか船泊すらむ安礼の崎こぎたみ行きし棚無し小舟」

が、その代表作といはれてをるのであります。

山上憶良のには選びたいのが数々ありますが、晩年の力づよい「をのこやもむなしかるべき萬代に語り続くべき名は立てずして」を採りました。

大伴旅人の、酒をほむる歌十三首の連作のはじめの一首、「験なき物を思はずは一つきの濁れる酒を飲むべくあるらし」を採りました。亡き妻を偲んだ作、その他とりたい作はありますが。

山部赤人では、「田子の浦ゆうちいでて見れば」が、かの百人一首によつて有名でありますが、あれは、長歌の反歌としてよいのであるといふことをかつて小論文に書いたことでもあります。「若の浦に汐みちくれば濁を無み」は、その景が目にかぶすぐれた作であります。ここには、吉野に於ける清楚な一首「み吉野の象山きよの木末には幾許も騒ぐ鳥の声かも」をとりました。なほこの歌の第四句は、「ここだもさわく」で「さわく」ではありませぬ。萬葉語の中には、後世濁音になり、従来濁音によまれてゐたもので、当時は清音であつたといふことが国語学の上でわかつてきたものがあります。

高橋蟲麿のは「富士の嶺ねを高みかしこみ天雲もい行き憚りたなびくものを」を選びました。「右の一首は蟲麿の歌の中に出づ」というた左註のある歌であります。自分はその前に掲げてある「なまよみの甲斐の国は」の長歌及び「富士の嶺にふりおける雪は」の反歌と共に、三首とも蟲麿の作であらうと考へてをります。

大伴家持は、萬葉集中最も多くの歌を伝へてをるのであります。卷十九の終の三首——家持が新しい方向に進んだ歌の中の一「春の野に霞たなびきうらがなしこの夕かげにうぐひす鳴くも」を採りました。此歌は「春の野に霞たなびき」で小休止になり、「うらがなしこの夕かげに」とつづくのであります。「霞たなびきうらがなし」ではありませぬ。

萬葉の女流歌人は、額田王、安倍女郎、坂上女郎、笠女郎等があります。ここには、狭野ちの弟上の娘子の、千歳せんざいのもとと猶情熱の炎のもえたぎるのをおぼえる一首「君が行く道のながてを繰りたたね焼き亡ぼさむ天の火もがも」を採りました。

次に萬葉風歌人として第一に挙げるべき源実朝の作の中では、「八大龍王雨やめ給へ」は、若い將軍が民の愁を愁へた堂々たる作であります。太上天皇より御書を下し賜うたにささげた、誓の歌ともいふべき三首の中の一「山

はさげ海はあせなむ世なりとも君に二心吾あらめやも」を挙げました。此の歌は、定家所伝本金槐集の出現によつて、建暦三年十二月、即ち実朝廿二歳までの作の中のものといふ事が知られました。その二年前の建暦元年には、鎌倉で大地震がありました。さういふ実感から「山はさげ海はあせなむ」というたのではなからうかとも思はれます。

賀茂真淵は、近世の歌壇に萬葉歌風を唱道した第一人者で、とるべきのが多くありますが、九月十三夜に縣居あがたゐでよんだ数首の中の一首「秋の夜はほがらほがらと天の原てる月影に雁なきわたる」を採りました。

田安宗武は、真淵に国学を問うて後、萬葉風の歌を詠み出しました。その歌集あもりこと天降言の中から、稚氣に富んだ「武藏野を人は広しとふ我は唯尾花分け過ぐる道とし思ひき」の一首を採りました。

揖取魚彦は下総佐原の人、江戸に出て真淵の家の近くに住み、縣門歌人中、最も萬葉風に長じてゐました。その調べの高い一首「天の原吹きすさみたる秋風に走る雲あればたゆたふ雲あり」を選びました。

良寛禪師のは、天真爛漫なその生活から生れた「手まりつきつつ子供らと遊ぶ春日」の歌などをとも思ひました。素朴靜寂な「山かげの岩間を伝ふ苔水のかすかに我はすみわたるかも」の歌を採りました。

平賀元義は、明治時代に世に知られた岡山の歌人。ますらをぶりの作なる「高田のや加佐米の山のつむじ風ますらたけをが笠ふき放つ」を選びました。吾妹子についての歌の多い作者なので、作者は不満であるかとも思ひますが。

橘曙覧のは、恬淡な生活吟が多い。ここには、彼の最も愛した酒の歌の中から「とくとくと垂りくる酒のなりひさご嬉しき音をさするものかな」を選んだので、曙覧はよく選んだというてくれられるかと思ひます。

明治時代に新たに萬葉風を興した正岡子規君の歌について、自分がかつて数首を選んで斎藤茂吉君に意見をきいたことがありました。その時、藤の花の連作の中の「瓶にさす藤の花ぶさみじかければ畳の上にとどかさざりけり」の歌が、との答であつたので、ここに掲げて、夙交はりを結んだ正岡君、後に親しくした斎藤君を偲ぶ種子くさねとしたのであります。

以上、あるはくだくたく、あるはいひ足りないとも思ひますが、思ふままを述べたのであります。